

機関番号：32504

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2008～2010

課題番号：20520663

研究課題名（和文） 石造遺物からみた信仰集団と地域文化圏
—手児奈講碑を中心とした歴史考古学的研究—

研究課題名（英文）

Archaeological approach to the local culture and folk religion of the late Edo era
—Historical archaeology of the *Tekonakou-hi* (手児奈講碑)—

研究代表者

朽木 量 (KITSUKI RYO)

千葉商科大学・政策情報学部・准教授

研究者番号：10383374

研究成果の概要（和文）：

本研究の目的は、近世石造物について横断的に比較し、地域的な文化圏を再構成することにある。そこで、江戸後期の南関東地方において地域的な信仰を集めた安産講である「手児奈講」とその講が造立した「手児奈講碑」を取り上げ、その普及過程を明らかにするとともに、子安講・待道講など他の安産講碑といった多様な石造物データから復元した当時の日常的交流圏の中で位置づけ、江戸後期における土着信仰の一般化の過程を明らかにした。

研究成果の概要（英文）：

The purpose of this study is to compare the stonework of the Edo era transversely. Therefore I handle the *Tekonakou-hi*, stone statue erected by *Tekonakou* religious group in east Chiba prefecture. Comparing with the archaeological data of other stone monuments including the *Koyasukou-hi* and the *Matsudoukou-hi*, I clarified the local culture and the diffusion of vernacular religion of the Edo era.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2008年度	1,200,000	360,000	1,560,000
2009年度	1,100,000	330,000	1,430,000
2010年度	1,100,000	330,000	1,430,000
総計	3,400,000	1,020,000	4,420,000

研究分野：歴史考古学・物質文化研究・歴史民俗学

科研費の分科・細目：史学・考古学

キーワード：地域文化圏、女人講、手児奈講碑、東葛地域、歴史民俗学、歴史考古学、民間信仰、近世石造物研究

1. 研究開始当初の背景

これまで近世石造遺物研究は、庚申塔などを中心に民間信仰史的観点から研究されてきた。庚申塔は、造立される事例数も多いため、比較的研究対象となりやすい反面、その造立主体は、地域的に限定された比較的小規模な集団であるため、広範な分布域は見られるものの、集成して比較した場合、大まか

な傾向しか指摘できず、多くの地方自治体をまたぐような地域的な文化圏を再構成するには到らなかった。また、最近では、民俗学の福田アジオが『歴史探索の手法-岩船地蔵を追って-』を著し、石造遺物の多様な歴史資料性を指摘して、民俗学・歴史学・石造美術史など学際的な学問的関心が高まりつつあるが、前掲書に見られるごとく、考古学的

関心から物質的資料としての石造遺物を総括的に扱った研究は多くはない。わずかに、行政レベルでの悉皆調査を背景に、畑大介「石造馬頭観音の歴史資料性」(『帝京山梨文化財研究所研究報告』10)、石川治夫「石仏・石神・石塔の形態と変遷」(『沼津市史研究』7)等があるのみである。また、本研究で具体的に扱う手児奈講については、万葉集の手児奈伝承についての研究、民俗学的観点からの現代の手児奈祭りについての研究があるが、近世における手児奈講研究については、自治体史や郷土史家の著作(千野原靖方『手児奈伝説』)等に僅かに(数行から1頁程度)個別事例の記載はあるものの、事例を集成し総括的に論じたものは皆無である。

研究代表者はこれまで、近世墓標を対象として、当時の歴史的・社会的背景を踏まえつつ歴史考古学的に研究を行ってきた。とくに、膨大な造立総数をもつ墓標データを基に、淀川・木津川流域など多くの地方自治体をまたぐような地域的な文化圏を再構成してきた。こうした手法は、墓標が数多く造立されたことにより統計処理が可能であったために行うことが出来る手法であったが、数年〜十数年おきにしか造立されない石造遺物に、こうした統計的手法が用いられることは多くはない。そこで、特定の種類の石造遺物のみならず、コアとなる石造遺物(本研究では手児奈講碑)を中心に、複数の石造遺物から看取される地域性を重層的に重ねあわせて分析する手法を着想するに至った。また、2007年春に流山市周辺で本研究に関わる予備的調査(実地踏査)を私費で行った結果、手児奈講が東葛地域を中心に分布していることが分かった。このことから、手児奈講を中心として近世石造遺物について、種類を超えて横断的に比較し、歴史考古学的視点から地域的な文化圏を再構成することは、当時の日常的交流圏と、江戸後期における土着信仰の一般化の過程を明らかにすることにつながるという。さらに、江戸とその周辺といういわゆる「地回り経済圏」が下敷きになって考えられてきた江戸中心の文化圏を見直し、江戸を媒介としない地方間の交流の復元を行うこととした。

2. 研究の目的

本研究の目的は、近世石造物について横断的に比較し、地域的な文化圏を再構成することにある。そこで、本研究では、石造遺物の考古学的資料価値を再確認し、その資料操作上の新たな方法論を確立するため、当該地域における数種類の石造遺物に記された時間的空間的データと、そこから看取される地域性を重層的に分析する。そのため、分析の中核をなす石造遺物は、その文化的中心地(遺跡

に準えるならばタイプサイトに該当する)がはっきりとしているものが好適である。

本研究で具体的に取り上げる手児奈講碑は、その信仰対象である手児奈神が千葉県市川市真間にある手児奈霊堂に祀られており、その信仰上の中心地となっている。さらに、その信仰の分布範囲は、千葉・東京・埼玉を中心に信仰圏を持つ。こうした明確な地域性を持つ遺物に他の石造遺物のデータを重ねあわせることで、地域史を構成する物質資料である石造遺物を多角的に検討した。そして、その重層的なデータを基に、当時の日常的交流圏と、江戸後期における土着信仰の一般化の過程を明らかにした。

3. 研究の方法

本研究は、江戸を媒介としない地域文化圏の復元を重層的に行うため、四段階に分けて研究を行った。まず、第一段階では、手児奈講の範囲を確定するため、手児奈講碑を集成し、その分布域を確定する。さらに、近世前期に手児奈伝説の顕彰・普及活動に取り組んだ鈴木長頼の事績について『鈴木修理日記』等の文献史料等の精査を行うとともに、手児奈信仰の普及・一般化の過程を『江戸名所図絵』等の名所案内や地誌などの記載(記載された時期や内容)から明らかにした。第二段階では、第一段階で調査した手児奈講碑所在地周辺で、文献調査および聞き取り調査を行ない、手児奈講の実態把握を試みた。しかしながら、手児奈講はほぼ廃絶しており、当時の状況を直接的に知るインフォーマントに遭遇できなかったため、過去の聞き取り調査の成果を集成する形となった。第三段階では、手児奈講分布地域において他の石造物データの集積と時空間データの抽出を行った。女人講である手児奈講の特徴に配慮し、競合する他の女人講である子安講や待道講のデータを中心に集積した。さらに、GISソフトを利用しそれらを時期別に比較した。第四段階では、各石造物のデータを集積した結果を基に、近世における手児奈伝承の成立・普及過程と、そこから看取される地域文化圏について検討した。その際、寺院本末帳集成などを利用し、手児奈信仰の宗教的母体である手児奈霊堂や弘法寺との関係を中心に検討した。また、大正期に手児奈霊堂境内に建てられた「安産講記念碑」の施主の地理的分布や、弘法寺の灯籠の施主の地理的分布なども参照し、前段階での女人講中心の分析に加えて多様な石造物データを並行して検討することにより、多角的な分析を行うよう試みた。

4. 研究成果

上記の研究方法に基づいて得られた本研究の成果については、以下の3点から検討を行ったので、順次述べることとする。

(1) 手児奈信仰の成立と手児奈講

手児奈姫は万葉集に出てくる伝説上の人物で、この手児奈姫を祀った最初の祠堂の成立は定かでない。しかし、文亀元(1501)年に日与上人が既存の祠堂を改修し手児奈霊堂を建てたとされている。その後、元禄9(1696)年に鈴木長頼と弘法寺の日貞上人により万葉真間顕彰碑が真間の継橋、真間の奥津城、真間の井の場所に建てられ顕彰され、広く知られることとなった。手児奈霊堂の寺号碑は寛政7(1795)年に根本の澤田嘉右衛門により建立されている。また、手児奈霊堂は文政7(1824)年に再建されていることが棟札により分かっている。これらのことから、千野原靖方が指摘するように(千野原 1986)、化政期には安産信仰が本格化しているといえる。ただし、手児奈信仰の重要な要因である安産の霊験については、化政期に成立した地誌である『遊歴雑記』(1814年刊)、『勝鹿図志手繰舟』(1813年刊)、『船橋紀行』(1832年刊)には霊験の記載はなく、天保期以降に成立した文献である『手児奈尊霊略縁起』(1830年刊)、『江戸名所図会』(1834年刊)、『手児奈大明神略縁起』(1830年刊)などには霊験の記載があるため、やや時代が下るのかもしれない。

こうした手児奈信仰に基づく講はいくつか研究されている。松田有理子は手児奈信仰を基にする安産講について研究し、それが講元と講員のみで成立しているもので、浅草や神田周辺に分布していることを指摘した(松田 1990)。また、長沢利明は真間の十三日講についてふれ、題目講に類似したものであることを指摘した(長沢 1984)。本研究で扱った東葛地域に広くみられる手児奈講はこの二つの講とは異なるもので、江戸時代から明治時代を中心に、松戸・流山・鎌ヶ谷・船橋などに存在したことが知られている。安産祈願を目的とした女人講で、代表者が代参してお札を入手したり、出産時に手児奈霊神の掛軸を掛けたり、手児奈霊堂に参拝して蠟燭をもらってきたりする信仰である。この手児奈講が母体となって手児奈講碑が造立されたと考えられる。

(2) 手児奈講碑の分布について

現存する手児奈講碑は看見の限りにおいて9例であった。これらの分布をみると、野田市・流山市・松戸市・船橋市といった市川市の周辺に散発的に分布していることが分かる。その一方で、市川市内には存在していない。また、市川市の東よりは、江戸川を通じた交流が影響したのか、野田や流山といった北側に分布が伸びていることが分かる。また、東葛地域の手児奈講は、弘法寺による布教で普及したとされてきたが、分布図を作

成し、手児奈講碑の分布と弘法寺の末寺の位置を比較すると、直接的連関は指摘できなかった。ただし、野田市ニッ塚の事例での石造物の開眼主は弘法寺末寺の本覚寺住職であり、中には弘法寺との関係を示唆するものもある。その一方で、流山市駒木台法栄寺の事例のように他寺の末寺(法栄寺は本土寺の末寺)や、流山市桐ヶ谷浄栄寺の事例のように他宗派の寺の管理下にある事例もある。こうしたことから、事例数が少ないため明証することはできないが、各事例間で明確なつながりや地域性が指摘できるというよりは、散発的に存在しているといえる。また、考古学的に見ても形態や成立時期が多様であり、同一の石工の手になるものとは考えにくい。手児奈講碑の製作にあたって範型となる特定の型式があったとは考えにくい。したがって、これらの手児奈講碑は、それぞれの地域で個別に製作されたものといえる。

(3) 東葛地域における他の講碑との比較

次に、東葛地域における手児奈講碑を相対的に位置づけるため、他の講碑との比較を行った。この地域において、施主に女性名が多く記載される女人講としては、他に十九夜講、子安講、待道講が挙げられる。

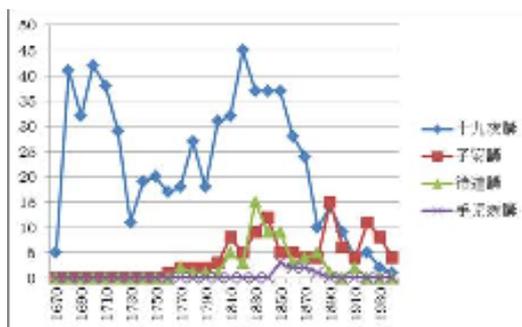


図 東葛地域における女人講関連の石碑造立数の変遷

図は東葛地域におけるそれらの講碑の造立数をまとめたものである。これを見ると、十九夜講碑が先行し、それが少し停滞した時期に子安講碑や待道講碑が出現する様子が分かる。子安講は、石田年子が指摘したように(石田 2006)、八千代市・印西市周辺を中心として千葉県北西部に広範に分布する。造立時期としては1730年代に始まり、1770年代に本格化する。また、待道講は、近江礼子が指摘したように(近江 2000)、我孫子の待道大権現を基にする信仰で、1770年代に始まり、1810年代に本格化する。子安講碑、待道講碑ともに1830年には造立数が増加していることから、19世紀前半でその信仰は十分に普及していたと考えられる。その一方で、手児奈講碑は1856年が初現で、1850年代が最も多く、その後漸減していく。先に述べたよ

うに、手児奈信仰そのものが 1810～30 年頃に確立したと思われるため、手児奈講碑が 1850 年代まで出遅れるのは信仰の成立時期の遅れによるものと考えられる。近江礼子は手児奈講が待道講の普及を阻害したとの認識を示したが（近江 2000）、手児奈講碑の分布や造立数の変遷を見る限り、むしろ、子安講や待道講が先行したため、手児奈講は東葛地域において主導権を握ることができなかつたとみるべきであろう。また、手児奈講碑の分布が散発的であるのも、先行する子安講・待道講の狭間で定着していったためと考えられる。

以上の手児奈講碑に関する考察から、以下の諸点が指摘できる。

- ① 手児奈講碑は 1850 年代から、野田市・流山市・松戸市など東葛地域北部を中心として造立された。
- ② 手児奈講については弘法寺の布教によるところが大きいといわれてきたが、手児奈講碑の分布と弘法寺との関係は直接的な関連はあまりない。
- ③ 手児奈講碑の形態から判断する限り、範型となるような特定の型式は認められず、個々の場所で散発的に製作されたと考えられる。
- ④ 子安講・待道講など他の女人講碑の造立状況と比較すると、手児奈講碑は明らかに遅れている。

これら 4 点のことから、手児奈講は弘法寺の布教による教線拡大というよりは、手児奈霊堂の整備と、『江戸名所図会』・『成田参詣記』などに記載されて有名になったことにより自然発生的に成立したものと見える。東葛地域の手児奈講は、現在ほとんど廃絶しており、その実態は明らかでない。しかし、これまでほとんど注目されてこなかった手児奈講碑を集成したことで、手児奈信仰とその普及過程、他の女人講との競合が明らかとなった。こうして集積された石造物のデータは、歴史学・石造美術史・歴史地理学・民俗学などの分野に資するデータとなることが期待される。また、石造物についての考古学的関心について述べると、直接的対象となった手児奈講碑をはじめとして、子安講・待道講・安産講など他の女人講碑のデータとの比較だけでなく、一見すると無関係である石灯籠の寄進者データまで含んで重層的に比較検討するという新たな分析手法は、考古学の方法論的深化に寄与するものとなることを望みたい。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 2 件）

① 朽木 量 2011「手児奈講碑からみた東葛地域における手児奈講の展開」『市史研究いちかわ』2 75 - 82 頁 査読無

② 朽木 量 2009「メモリー・スケープによる地域文化の再構築」ヘリテージ・スタデーズ研究会編『文化資産の活用と地域文化政策の未来講演論文集』26-32 頁 査読無

〔学会発表〕（計 2 件）

① 朽木 量「江戸川を通じた信仰とその普及～手児奈講の事例～」『第 6 回風景フォーラム』2009 年 11 月 29 日 於：千葉商科大学

② 朽木 量「東葛地域における手児奈講の展開～手児奈講碑を中心に～」『日本民俗学会第 60 回年会』2008 年 10 月 5 日 於：熊本大学

〔図書〕（計 1 件）

① 朽木 量 2011「新たな地域文化遺産概念の提唱－ヴァナキュラーな価値を重視した多声的な文化財の必要性－」千葉商科大学政策情報学部 10 周年記念論集刊行会編『政策情報学の視座』日経事業出版センター 306 - 321 頁所収

〔その他〕

ホームページ等

<http://gp.prof.cuc.ac.jp/~kutsuki/kaken/tekona.htm>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

朽木 量 (KUTSUKI RYO)

千葉商科大学・政策情報学部・准教授

研究者番号：10383374

